

## コラム 70 ーバターン死の行進の真相

防衛省防衛研究所戦史室の『戦史叢書比島攻略作戦』によると、「降伏時バタアン半島の米比軍と流民の状況は、士気は全く衰え、食料の不足とマラリアの流行とのため極度に衰弱していたが、コレヒドール攻略戦を目前に控えた軍としては、その準備や防諜上の観点、および米比軍の砲爆撃によって傷つけないためにも、これらの捕虜や住民を原位置に留めておくことはできなかった。

しかも、米比軍の降伏が意外に早かったため、これら捕虜に対する食料、収容施設、輸送などに関し準備を行なう余裕もなかった。当時、軍自体が食料および輸送力の不足に苦慮している状態であった。したがってこれら捕虜もいきおい比較的食糧などを補給しやすい地域に、徒歩で移動させなければならない事情にあった」

当時の第14軍参謀長の和知鷹二少将（後、中将）は、「死の行進」に関し、次のように述べています。

「元来バタアン半島はマラリアのはびこる地帯である。それだけに敵味方ともマラリアにかかり、その他にデング熱や赤痢に倒れる者もあって全く疲れていた。

バタアンの比島軍の捕虜は5万であったが、その他一般市民で軍とともにバタアンへ逃げ込んだのが約2~3万は数えられ、合計8万に近い捕虜があった。1月から4月まで、かれこれ3ヶ月半も、バタアンの山中にひそんでいたためほとんどがマラリアその他の患者になっていた。その彼らを後方にさげねばならなかった。なぜなら軍にはまだコレヒドール攻略が残っていたからである。

捕虜は第一線から徒歩でサンフェルナンドへ送られた。護送する日本兵も一緒に歩いた。水筒1つの捕虜に比し背囊を背負い銃をかついで歩いた。全行程約60数キロあまり、それを4~5日かかりで歩いたのだから牛の歩くに似た行軍であった。疲れきっていたからである。南国とはいえ夜になると肌寒くなるので、日本兵が焚火をし、炊き出しをして彼らに食事を与え、それから自分らも食べた。通りかかった報道班員が見かねて食料を与えたこともある。できればトラックで輸送すべきであったろう。しかし貧弱な装備の日本軍にそれだけのトラックのあるはずもなかった。次期作戦、すなわちコレヒドール島攻略準備にもトラックは事欠く状態だったのである。

（中略） むろん道中でバタバタと彼らは倒れた。それはしかしマラリア患者が大部分だった。さらにもう1つ付け加えれば、彼らはトラックで移動することを常とし、徒步行軍に馴れていなかったことである。」

山岡荘八の著書「太平洋戦争」には、比島攻略作戦に従軍した山岡荘八の畏友である記者の報道記事として、バターンでの投降米兵と現地人避難民及び日本兵について、次のような描写があります。疲れ果てた3者の姿と、そのなかで見せた日本人兵士の苦勞と優しい心遣いが表現されています。

「話をしているうちに敵軍の不思議な性格が明瞭になって来た。彼らは最高指揮官の

命令によって動くのではなく、中間の団体長が勝手に投降をするのである。バターン半島の東地区、西地区というように、おのおの、ばらばらに投降のために白旗が作られていた。東地区の将校は西地区のことを知らず、西地区の指揮官は東方のことに関与せず、またバターン全島が降伏しても、コレヒドールはなおも射撃をやめないのである。各所で、まちまちにあらわれた敵軍使との会見が行われたわけであるが、わが軍はなおも追撃前進を続行した。この時から投降兵の群れはいたるところから我々の前に現れてきた。米兵が来る。比島兵が来る。どこにこれだけの兵隊がいたのかと思われるほど出て来る。わいて来るという感じだ。実を云うと私はこの半島の戦線には、こんなに多くの米兵はいないのかと思っていた。サマットの frontline であまり見かけなかったのもそんな気がしたのかも知れない。米兵はほとんど後方にいたのであろう。私はしまいには不思議な感じがしはじめるとともに、妙に腹立たしい思いに駆られた。これだけの軍隊がいながら、なぜ戦おうとしないのか。米兵はいずれも背が高く、頑丈な身体つきをしている。日に焼けて、トマトのような真っ赤な顔になり、たくましい髯面にぎょろぎょろした眼を光らせている。毛むくじゃらの太い腕に、さまざまな刺青をほどこしている兵隊もある。それらの兵隊が、銃を捨て、だらしなく鉄帽を斜めにかぶり水筒を腰にぶらさげ、ズックの背囊だけを大事そうにかかえて力ない足どりでぞろぞろとでてくるのだ。日本の兵隊が1人で2百も3百もの米兵をあずかる。中には1人で5百も米兵を引率してゆく。日本の兵隊は肩までしかない。おまけに軍帽はよごれてぼろぼろになっている。これは漫画ではないのだ。(—中略—) このときに、我々の心を衝いたのはあわれな難民たちである。戦火に追われた無数の難民がバターン半島の山中に逃げ込んだ。バターンの戦火がおさまると、これらの難民たちがぞくぞくと出て来て各所に屯した。投降兵と難民とが、とめどもなく陸続とつづいた。難民たちの多くはもはや歩くのがやっとなのである。歩けなくなって道端に倒れる者も少なくない。老人や女子供はむざんなほど痩せ細り、声をだすのにも骨が折れるくらいだ。食糧もつき、1週間以上も何も食べずにいた者も珍しくない。その上多くの者がマラリアやデング熱にかかり、山中で倒れた。赤ん坊は真っ青な皮膚をむき出して母親に抱かれているが、それは生きているものやら死んでいるものやらわからない。母親はもとより乳がでないのだ。(—中略—) 日本の兵隊はそういう避難民を見るとだまっていることができない。自分が今日から食べるものがなくなることも忘れて、持っている限りの食糧をやってしまう。携帯口糧が少しずつ難民に分配される。煙草をやる。水筒の水をやる。兵隊はすっからかんになる。子供たちの頭を兵隊はなでてやる。こういうときに兵隊の心の中には、きっと故郷のことが思い出されているのであろう」

バターン半島で起こったことの実態はこのようなものあり、マラリアにかかった捕虜を、トラックにも乗せず5日も歩かせれば、倒れて死ぬものが出るのは当然ですが、日本兵の中にも死亡した者もいたのです。合計8万人もの捕虜が、その半数にも満た

ない日本軍の前に投降してきましたが、日本兵にも食料は乏しく、かつ輸送手段もありませんでした。そのような中で、1人の日本兵が多くの捕虜を監視しながら、サンフェルナンドの捕虜収容所まで、徒歩による行軍を余儀なくされたために起こった悲劇ではありますが、日本兵は自分たちの食料も乏しい中で、避難民や捕虜に対してできる限りの事をしており、日本軍としては捕虜を虐待する意図はなかったのです。

なお、米比側のマッカーサー司令官（写真）は、3月12日に部下を見捨て、妻子などと魚雷艇でコレヒドール島を脱出し、ミンダナオ島に逃れました。ミンダナオ島からは爆撃機でオーストラリアに向かっています。このような事態が生じたのは、いわば、指揮官の敵前逃亡によるところが大きかったといえるのであります。



マッカーサー

一方、本間司令官は、戦後マニラ軍事裁判において、捕虜虐待による有罪判決を宣告され処刑されます。勝者による復讐としか言いようがありません。

前述したように、日本は明治以来、武士道と順法精神に厚く、国家間の約束や国際法規などを忠実に守ってきた実績と伝統があります。

昭和16年12月8日の真珠湾攻撃においても、日本海軍の航空隊が標的にしたのは、敵の軍艦と軍用機のみで、陸戦法規第25条「防守せざる都市、村落、住宅又は建物はいかなる手段によるも、これを攻撃又は砲撃することを得ず」の国際法の規定を忠実に守り、真珠湾の市街地、民間施設、病院船などには一切攻撃しませんでした。真珠湾攻撃後、航空隊指揮官淵田中佐が、天皇陛下に攻撃報告をした際、陛下からの最初の言葉「病院船などは攻撃しなかつただろうね。民間人は攻撃しなかつただろうね」に象徴されているように、国際法遵守の精神は陸海軍人の心に深く浸透していたといえるのです。

また、大東亜戦争開戦後、日本は捕虜の取り扱いに関する陸戦法規の規定を守り、日本国内及び国外に合計17箇所の捕虜収容所をつくり、収容した捕虜に対しては、できるかぎりの待遇を施していたのです。しかしながら、戦局の悪化に伴い、特に国外においては日本軍に対する空襲・爆撃が激しくなるにつれて、収容所の移動に伴う多くの捕虜の犠牲がでたこと、あるいは国内においても監視員による捕虜への過剰な暴力があったのも事実であり、悔やまれるところでもあります。